

眼科検査のあれこれ

～眼科コラム～

聖隸沼津病院 眼科検査室

動的視野検査について

今回は視野検査の中でも、見える全ての範囲を測定する動的視野検査について解説していきます。

動的視野検査とは？

簡単に説明すると、光の明るさ・大きさを組み合わせ、見えないところから見えるところに向かって動かしていき、光が認識できたらボタンを押してもらいます。検査時間は片眼 15 分程度です。

静的視野検査と異なる部分は、中心 30 度に限らず、見える範囲すべてが検査範囲になり、光が出てくる場所も必ず決まっているわけではなく、360 度様々な場所から光が出てきます。

動的視野検査では、周辺部を含めた視野全体の状態が把握できます。また、コミュニケーションをとりながら測定を行う事が出来るため、高齢者や子どもの場合に有利といわれています。

しかし、検査員が操作をして測定するため、検査者の技量に左右されるという欠点もあります。

図 1

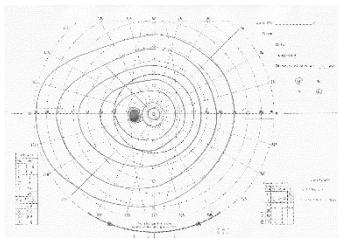


図 2

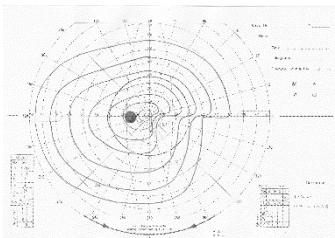


図 1 は視野異常のない人の視野、図 2 は緑内障の人の視野の見本です。

動的視野検査では、視野全体がどれくらいあるのかを、他覚的に把握することができます。

どんな人が視野検査をするの？

視野障害が起きる疾患には、緑内障や視神経疾患、網膜疾患、頭蓋内疾患など様々なものがあります。

例えば……

緑内障では、神経の細胞と繊維が障害され、障害が起きた部分に視野障害が現れます。神経に沿って障害が起きるため、定期的に視野検査を行うことで、緑内障の進行具合を把握することができます。眼底写真を撮ることで、緑内障の可能性があるか検査することもできます。

網膜色素変性では、網膜が変性し、色素沈着が起こり、変性した網膜の部分に視野障害が現れます。周辺部の網膜に変性が始まり、病気の進行とともに周辺部の視野異常を自覚します。

眼から大脳へ電気信号にて情報が伝えられているため、腫瘍・脳梗塞・脳出血などの頭蓋内疾患では、障害を受けた部位に応じて、視野障害が現れます。視交叉より眼に近い場所での病変では、片眼に、視交叉とそれより後ろの病変では、両眼に視野障害が起こります。

それぞれの疾患には特徴的な視野異常が現れることが知られており、病態の診断・障害部位の特定・病状の経過観察に用いられています。